

二〇〇九年度

文學會賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會

ニーチェのチヒリズムと芸術について

〇六七四一四三 山崎優太

現代社会において起きている指標の欠落という問題は、国家の先行きの不透明さといった大局的な見地から、個人の生き方、価値観の曖昧さなどといったごく内的なものにおいてまで、一つの精神的な問題として確かに存在している。こうした「指標の欠落からくる不安」という問題を、西洋哲学ではニヒリズムとして扱ってきた。本論ではニヒリズムを扱うに当たってニーチェの論を取り上げ、また、そうした問題現象の中で尚打ち立てられる真理性について考察を行った。

第一章では、ニヒリズムが持つ性質について、ニーチェの著作「ツァラトストラ」を取り上げ考察した。ニーチェによれば、ニヒリズムとは「全ての事象は無限に解釈可能であり、そのため、そこには如何様な価値の指標も生まれえない」というものである。これは我々が何かに意味を見出すにあたり、そこには必ず解釈が行われていることに起因している。解釈は本来多様なものであり、そこに指標は存在しない。こうした無限の解釈可能性か

らくる意味の無意味化という問題が、ニヒリズムの性質として挙げられる。

しかし同時に、このような問題現象の中で尚意味を打ち立てるものとして、ニーチェは「超人」という概念についても言及している。ニヒリズムにおいて全てのものが無意味化した中で、そこに残るのはただ生成消滅する大地のみであり、その「大地の志」からして唯一の真理性を打ち立てるのがこの「超人」である。ここでは己の意志性と、生成せんとする大地の意志性が一つになり、いわばそれ自体の個的な価値、真理性をそこに打ち立てている。

こうした個的真理性を考察するに当たり、第二章ではハイデッガーの論を取り上げた。ハイデッガーの著作「芸術作品の根源」においては、個的真理性を持つものとして芸術作品が扱われている。ここでは、芸術においては存在するものの真理がそれ自体の内に据えられてしまっており、芸術はそれ自体一つの「世界の開示」として個

値を持つっているとされる。こうした価値の在り方は、超人的な個々の真理性を同様の構造にあると言えよう。

また第三章では、ニーチェの著作「悲劇の誕生」を基に、ニーチェ自身の芸術観について考察した。ここでは、ギリシア悲劇における「ディオニュソスのなるもののアポロンの仮象世界による感覚化」という構造が見受けられた。「ツアラトストラ」において述べられていた「超人」の個々の真理性が、ここでは陶酔からの根源的一者との同一化という観点から、芸術として、感覚されるものとして扱われている。

第四章では、ニーチェとハイテッガー、両者の挙げる芸術における真理性について比較した。ここでは、ハイテッガーの個々の真理性がもつばら芸術作品という作品存在そのものに拠っているのに対し、ニーチェの個々の真理性は、人間個人の意志性がその根拠になっているという構造が見受けられた。ニヒリズムが精神的な問題である以上、超人的な真理性を持つのはニーチェの意志的真理性であろう。

以上の点から、本論においては、ニヒリズムの中で真理性を持つものとして個々の真理性が挙げられ、そこには「意志性」が重要な根拠として置かれていることが明らかになった。

ニヒリズムは内的な問題であり、意志性もまた内的な

問題である。こうした問題を論じる以上、そこには当然、客観性や普遍性に欠けているのではないか、という懸念が生じるであろう。しかし、ニヒリズムという問題現象自体において、そうした客観性、普遍性を絶対視する態度そのものが、見直されるべき対象として反省的に扱われている以上、このような問題についての考察は行われるべきであろう。

流行語とメディア

○六七四一九一 米川 大輝

流行語は国語学大辞典によると、「新語の一種。その時代に適應して、きわめて感化的意味が強く、爆発的な民衆の使用語。多くは徐々に消滅するか、あるいは一般語彙に定着する。」と定義されている。言葉の通り、「流行した言葉」と捉える事ができ、多くの人に広まり、話されるものである。また現在、年に一度、流行語大賞が発表されており、この賞の存在がより我々に流行語を身近な存在にさせている事である。しかし、本当に流行語は流行し、広く人々に使用されているのだろうか。というのも近年、流行語が本来の意味での流行語ではなくなつてきているように思える。

私達が日常生活の中で、情報を得る上でメディアの役割は欠かす事ができない。それは流行語を知る上においても同様である。私達はいわばメディアに依存しているといえる。メディアが欠かせない存在になつていくほどに、私達はメディアの情報に左右されているのである。すなわち、メディアが何を取り上げるかによつて、私達

の流行語意識も変化していくのではないだろうか。私は近年、流行語大賞のニュースを見て、ふと思つた事がある。本当にこれらの言葉は流行しているのか、と。全てではないが、流行していると実感出来ない言葉が数多くあつた。二〇〇八年の「上野の四一三球」、二〇〇七年の「大食い」、二〇〇五年の「ポピーマジック」、また、政治家が発言し流行語とされた言葉である、二〇〇五年の「小泉劇場」、二〇〇四年の「中二階」等の言葉は私にそのような感覚を抱かせた。メディアには多く露出している言葉であるかもしれないが、実際に流行しているとは考えられなかつたのだ。私は、近年の流行語の特徴として、メディアへの露出が非常に多くなつていると感じる。つまり、多くの人に使用されている事よりも、メディアを通して、広く私達の目に入る・映る事への比重が強くなつていゝる事を感じるのだ。そこで私は、この流行語の新たな局面として、「人々の目に映る事で広く社会に普及し、一時的に多くの人に使用された言葉である。

だが近年、大衆のそれに対する認識・使用は定着しづら
いものとなっている。」を「新流行語」として定義し、
旧来の流行語を「旧流行語」とし、流行語の新たな特徴
を提示する。同様に、メディアの中だけで流行語となり、
実際には人々に使用されていない流行語の特徴として、
「メディア的流行語」の要素を指摘する。

現在の流行語に関し、愛知大学生、愛知学泉大学生二
〇〇名にアンケート調査を行った結果、流行語とは時代
を映す鏡であり、コミュニケーションを促進させるもの
として捉えられていた。さらに、否定的な見解ではあつ
たが、「メディア的流行語」の存在も認識されつつあつ
た。つまり流行語が「話す」ものから「視る」ものへと
認識されつつあるのである。だが、否定的な見解である
事、コミュニケーションを促進するものとして捉えられ
ている事から、人々にとって流行語とは未だ「話される
もの」であり、旧流行語の認識が強い事がわかった。現
在の流行語とは、「話されるもの」であるとする意識と、
使用されなくなり、「視る」ものへとなりつつある環境
との間に大きな溝が生まれているのである。今後の流行
語を想定してみるならば、更にこの溝が深まり、メディ
アを通して「視る」ものだけの流行語になってしまう可
能性もある。しかし、この想定はメディアの影響力が維
持される事を前提としたものである。今後、メディアの

影響力が低下すれば、流行語が島宇宙化し、多様なサ
クルで流行語が乱立する状況になるかもしれない。だが、
多くの人々が使用するという「共有性」の面では流行語と
は言えないだろう。今、流行語に起こっている事は、過
渡期的現象なのかもしれない。

在日外国人の子どもたち

— ニューカマーと教育支援 —

〇六七四四二一 田 中 裕 美

本論文では日本における外国人、特に七十年代後半に増加した「ニューカマー」と呼ばれる人々に注目した。彼らの人口は増えているが、現状を知るための調査は少ない。そこで就学時期にあたる子どもたちに焦点を当て、子どもや外国人全体が置かれている環境と日本との関係を探っている。

ニューカマーの多くは南米日系人であるが、東アジア出身者やインドシナ難民など一概に括ることは難しい。しかし共通しているのは彼らの日本との間に「距離」が生まれていることだ。それらの距離は格差として無意識の中に組み込まれ「不平等さ」を生みだす。それは子どもたちにも当てはまるのだ。

不平等さによって起きる問題の一例にTCKを挙げることが出来る。子どもたちは二つの文化間に挟まれているが、日本人側は日本への適応を最も重要な支援と捉え

続け、子どもたちの多くがアイデンティティを形成しづらいことから目を逸らし続けている。そのため自分をどちらの文化にも位置づけられないTCKが生まれている。教育現場では「文化的均一性」の考えがあり、子どもたちは日本的であるように指導されていく。その根本となるのが「同化」「競争」そして「単一」の考えである。それらを見直していかなければいつまでも子どもたちへの重圧が消えることはないだろう。何よりも文化的均一の意識は高校受験における不平等さや日本語教育重視の思考に影響を与えているが、それらが問題視されることは少ない。

先行研究の検証を行なうため、第三章では静岡県浜松市の支援について調査を行った。分析は公立小学校と学外の活動における参与観察が元となっている。そこで発見することができたのは、ニューカマー児童は「同化」

を求められるが、完全なる同化を行うことは拒まれてい
る、ということだ。日本に長期滞在する子どもたちは日
本語を習得し日本人と同じように振舞えるよう変わって
いくが、名前の表記方法や名簿上での区別などによりい
つまでも「外国人」である状況に変化は起きない。した
がって母集団と一緒になりたくともなれない、そんなジ
レンマに挟まれる。それはいざれ多くの児童がアイデン
ティティ消失の危機に陥りやすい構造に繋がっている。

ニューカマー児童がクラスの一員として認められるこ
と、そのためには「共生」していくことが大切となる。
本論文では二集団間が共生まで歩む道を「共生への4S
TEP」と名づけ図表化した。そこでは二つのグループ
の出会いから反発、そして容認までが描かれている。そ
して「共生」の形として想定できる三つの道、「住みわ
け」「同化」「共存」を比べたとき、共に在存していく、
という意味を含む「共存」こそが教育現場に求められ
る考えであると結論づけている。

共存は理想の形であり、容易に実現できることではな
い。日本に限らず多くの国において長年の課題とされて
きた。しかしお互いを知り、常に共感するわけではなく
とも認め合うこと、そしてお互いの感性を尊重し合うこ
とこそがこれから求められてくる、と考えている。

美術館、博物館における作品のデジタル化

〇六L四三九三 小田 千晶

近年、貴重な資産を後世に残すため、資料や文化財をデジタル化し、保存、蓄積そして公開するデジタルアーカイブが急速に普及してきた。本論文では、美術館・博物館におけるデジタル化の動向と、ウェブ上における作品の見せ方についての調査結果を述べる。

一、世界のデジタルアーカイブの動向

世界の博物館の専門組織(ICOM)は博物館資料情報のためのガイドラインを作成して国際標準を定めている。UNESCOが中心となり運用しているWorld Digital Libraryは、世界中の協力館から提供された印刷物等の情報を公開している。EUの欧州委員会が公開した文化遺産データベースEuropeanaでは欧州各国の機関が提供した作品等を閲覧できる。国別の取り組みとしては、イギリスではDCMSが国内の博物館情報を海外に発信しており、その支援を受けて国内施設の情報を提供するCulture24が公開された。フランスではBnFが資料、INAが視聴覚、RMN

が美術品のアーカイブを担っている。

アメリカではCIMIプロジェクトとして他国機関と共同で博物館情報をデータベース化している。韓国では国家文化遺産総合情報システムが国内の博物館情報を管理し、Korean National Heritage Onlineで博物館のデータベースを公開している。中国では敦煌研究院がデジタルアーカイブ技術で壁画の保存作業を行なったのがデジタルアーカイブに関する最初の試みだと言われている。故宮博物院も日本の凸版印刷会社との共同プロジェクトをはじめ、国内の中心となって事業を進めている。台湾では行政院国家科学委員会が各機関の収蔵品をデジタル化し、国家レベルのデジタルアーカイブを作成することを目的としたプロジェクトを二〇〇二年に開始した。日本では、文化庁と総務省が「Tapas構想のもと、全国の博物館等から提供された国宝の画像等を表事する文化遺産オンラインを二〇〇八年に公開した。

二、デジタルアーカイブにおける作品の見せ方

14の美術館・博物館のホームページを調査し、作品の見せ方を7種類に分類した。

「紹介写真と解説」は作品のサムネイルと、題名や作者名等の情報を公開する方法である。「代表的な収蔵品のインタラクティブな解説」は収蔵品の中で目玉となる物を様々な方法で解説するものである。「音声による解説」は音声で作品情報を解説する方法で、アムステルダム国立美術館等で視聴できる。「ビデオによる解説」は映像と共に作品を紹介する方法である。スミソニアン博物館ではYou Tubeで展示物紹介の動画を公開している。「仮想ギャラリー」は部屋の様子を360度見ることを可能にし、ヴァーチャルツアーと呼ぶ場合もある。「特定テーマ別の解説」はテーマサイトを設けて解説する方法で、エルミタージュ美術館ホームページでは7点のテーマが閲覧可能である。「タイムライン」は年表に作品のサムネイルを貼り付ける方法で、アムステルダム美術館ホームページでは一〇〇〇年分のタイムラインを公開している。

三、考察

近年デジタル技術の発展により様々な見せ方が可能となっているが、さらに新しい見せ方を開発・提供するこ

とが望まれる。また不正使用への対策、デジタルデータの長期保存技術等が必要となっている。多くのサイトでは限られた言語での提供しか行われていないが、国際化のためにはより多くの言語での提供が望まれる。またデジタル化やサイトの構築には多額の費用と専門家の養成が必要であり、これがデジタル化の障害となっていると考えられる。そして美術館・博物館の間の協力的体制やプロモーション活動も重要である。

尾張藩横井家陪臣岩田家の研究

○六七四三七四 奥田千晴

近世百姓は田畑の売買が禁止されていたが、実際は質入・質流の形で土地の移動が行われていた。質地・質流証文とは、百姓が土地を質入して金子を借用する際に作成される土地関係の証文であり、百姓の金融の手段であった。そして質地・質流の契約内容の変化は、質取主の「家」の状態に無関係ではないので、証文の変化によって「家」の変化も少なからず窺い知られると思われる。

本論文では『岩田家文書』を用いてこの考察を行った。岩田家は尾張国中嶋郡野田村の百姓であり、天明期に尾張藩士横井伊折介家に取り立てられ、文化期に正規の家臣（尾張藩陪臣）となる家である。天明期以降の質地証文を対象に、証文からみる岩田家の身分意識の変化について分析を試みた。

第一章では質地・質流証文全体の分析を行い、宛所・事書（表題）・質入主のいる村・質地のある村などの項目別にし、年号順に表にまとめた。

第二章では第一章での分析を踏まえて、証文の内容文

言の変化を居村野田村と他村に分けて考察をした。この結果、岩田家の身分の変化と質取内容の変化との相關関係から、四つの時期に区別できることを明らかにした。

①天明期の証文は質入・永代売（売買）の証文が多く、また横井家の正式な家臣でもないのに、岩田家はまた野田村・他村に対して百姓の意識で臨んでいた。②文化期は正規の家臣としての武士の給与をうける一方で、事実上の永代売による積極的な土地収集も行っていた。よってこの時期は野田村・他村に対して百姓と武士の意識が並立した状態であった。③文政期に入ると、野田村にはまだ多くの事実上の永代売を行っているが、他村には証文数が減少し始める。この変化の理由として文政三年の知行代の給与が考えられ、これにより武士としての意識が高まり、まず他村に対して武士として接し、土地収集を減少させた。野田村には文化期と変わらないので、他村と比較するとまだ武士よりも百姓の意識で接している。④弘化・嘉永期には野田村に対して、土地の請戻期間が

さらに延長された証文が新たに登場し、文化期の証文に比べると百姓に対して優しい証文に変化していた。この時期から野田村に対しても次第に武士として接するようになり、積極的には土地収集を行わなくなる。しかし証文をまだ交わしている点から、武士として金銭面での居村百姓を援助する立場として、まだ百姓の一面を残していたと考えられるのである。一方で他村との証文はほとんど交わされていない。

このように証文内容の時期ごとの変化は、岩田家の中で百姓から武士としての身分意識の変化の現れと考えられるのである。つまり身分意識の変化により、居村野田村と他村に対しての証文内容に差異が現れたのである。

第三章では、天明期に岩田家・横井家・三ヶ村（野田村・東鶴之本村・西鶴之本村）の間に交わされた質地証文や他の証文との関連を考察し、他の質地証文との作成理由の違いについて考察した。横井家が三ヶ村の年貢を担保として岩田家から先納金を受け取るが、三ヶ村は岩田家に年貢が払えず、代わりに三ヶ村連名で岩田家に質入をするのである。他の質地・質流証文は「百姓個人」対岩田家だが、この証文は「村」対岩田家であるので、「公的」な証文であるとした。

岩田家は横井家に取り立てられ、文化期に公的には武士身分になる一方で、実際は百姓としての意識もまだ高

く、積極的に土地の収集を行っていた。しかし次第に武士としての意識が高くなると、最初に他村に対して土地収集を控えるようになるが、居村野田村に対してはまだ百姓の一面を見せている。そして弘化期以降、野田村に対しても武士として接し、援助的な立場として証文を交わしていたと考えられる。

島根県邑智郡邑南町の「田舎ツーリズム」と地域活性

○六し四二九八 白井 麻実子

目的・調査方法 日本での農山漁村地域は共通して、人口の減少、農林漁業従事者の高齢化・後継者不足、地域の過疎化・高齢化などの諸問題に直面している。一方、都市住民の中には、日常生活で失いがちな「ゆとり」と「安らぎ」を求める動きと、都市を「故郷」とする都市住民が自分たちの「田舎」を探す動きが強まっている。

このような状況を背景に、農山漁村地域はグリーン・ツーリズム（以下G・Tと表す）を地域活性化の有効な手段とし、この活動の取り組みが盛んになってきている。本研究では、G・Tの推進活動が盛んな島根県のうち、G・Tを積極的に取り組んでいる島根県邑智郡邑南町の「邑南町田舎ツーリズム」に焦点を当てた。この活動がどのように地域に関わり、どのような問題を抱えているかを明らかにし、課題に対して提案することを目的とする。

調査方法として、現地でのアンケート調査と聞き取り調査を中心に分析し、検討する。

展開 「邑南町田舎ツーリズム」は、現在では100名を超える大きな組織へと成長し、今後もさらなる発展が期待出来る。

また、年間を通して様々なイベントが開催され、春と秋に開催される「芋ねえちゃんまつり」は、交流人口が100名を超える大きなイベントとなっている。参加者のイベントに対する満足度は高く、地元食材を使用した田舎料理への評価が高い。そして、参加者の多くはリピーターであり、アンケート回答者全員が、来年も参加したいと答えている。「邑南町田舎ツーリズム」を代表するイベントであり、「邑南町田舎ツーリズム」と共に成長している。

邑南町は「子ども農山漁村交流プロジェクト」の受け入れ地域であり、昨年7月に広島市立伴南小学校の5年生86名、教職員ら7名の計93名の受け入れをした。この受け入れは両者にとって心に残る思い出となり、児童には感動を実践者には自信を与えた。

結論 各調査から、『邑南町田舎ツーリズム』は地域に大きく2つの影響を与えている。第一は実践者の生きがいにつながっていること、第二に実践者、地域に経済効果をもたらしていることである。『邑南町田舎ツーリズム』を通して、様々な人との出会い・交流が生まれ、実践者の生きがいにつながっており、また、参加費等は実践者へ、地域での買い物は地域へと経済効果をもたらしていると考えられる。

課題として、PR不足、広島市を除いた都市圏との交流人口の少なさ、新規交流人口の少なさの3点が挙げられる。これらの課題に対して、インターネットの充実した活用、都市圏でのアンテナショップの運営を提案する。アンテナショップの運営は、情報提供の場であり、PR方法として効果的であるが、アンテナショップの運営はコスト面に大きな負担がかかり、採算が合う集客率が無ければ運営を継続することは困難である。現段階において、コスト面を含めてアンテナショップの運営は難しいが、イベント参加者の貴重な意見でもあるため、PR方法の手段の1つとして考えられる。

また、インターネットの充実した活用として、邑南町HPにヒットし易いように工夫することを提案する。『邑南町田舎ツーリズム』は特徴的な名称であり、記憶に残り易い反面、特定少数の人にしか知られていないのが欠

点である。G・Tと同様の活動であり、邑南町HP等のトップに、G・Tや田舎暮らしなどの言葉をもってくることを提案する。G・T関心者らが、邑南町を知る機会が増加すると考えられる。PR方法の工夫が、掲げている目標に直結していると言えるだろう。

『新可笑記』の研究

○六七四二四四 鈴木裕美子

『新可笑記』は元禄元年（一六八八）の十一月に刊行された、井原西鶴の武家物第三作品目であり、五巻五冊、全二十六章からなっている。

その内容としては、武家を中心とする話はもちろんのこと、それ以外に町人にスポットをあてた町人話や奇談、そして裁判・訴訟話も多く描かれている。そのため武家物に位置していながら、雑話的な作品のような印象を受ける。さらにその構成においては、中心的なテーマもなく、各章は相互関係を持っておらず、ばらばらに配置されているという見解が一般的となっている。そのため、『新可笑記』は西鶴作品の中でも評価が極めて低い。

だが果たして、『新可笑記』は何の意図も構成意識もなく書かれた作品であったのだろうか。

確かに『新可笑記』の中には、雑話的で関連性のない短編集のように見受けられる部分がいくつかある。しかしながら作品を詳細に読み進めていくと、巻の中などで関連したモチーフや似通った題材・設定が組み込まれて

いる部分をいくつも発見することができる。

井原西鶴は代表作『好色一代男』や『好色五人女』などの作品において、構成にかなりの注意を払っていることが指摘されている。そのため、『新可笑記』におけるモチーフや設定などのつながりも偶然に配置されたものとは考えにくい。そこには何らかの作者の意図、もしくは構成意識が反映されていたのではないだろうか。

そこで本論文では最初に、各章の内容・要素・設定などを分析することで、章の配置や巻全体の構成、それぞれの相互関連について考察する。その過程で、『新可笑記』が決してテーマや構成意識が欠如している作品でないことを確認していく。

その中でも、前半部と後半部に特徴的に表れている「二人話」と「三人話」のモチーフに着目し、西鶴の人物造形やモチーフの効果について分析を進める。

『新可笑記』の前半部には「二人話」のモチーフをいくつか発見できる。このモチーフでは、主要な人物が二

人登場し、さらにその二人の性質が特徴的に表現されているのである。そしてそれが物語の進行上、重要なポイントになっている。

後半部分の「三人話」では、主要な人物が何らかの關係を持った三人からなる。しかしそれに分類されるものの中に、「二人話」のモチーフも同時に使用されている章が多々あるのだ。なかには「三人話」にする必要性を見出せない章もある。にもかかわらず、「三人話」のモチーフを使用しているのは何か理由があるに違いない。それぞれの章を分類し、原拠とされている作品と比較していくことで、モチーフの効果と西鶴の人間認識について考察する。

このような分析を通し、より人間の特徴を克明に表現しようとした井原西鶴の創作意識を明確にすることで、少しでも『新可笑記』の魅力を引き出すことにつながればと思う。

ジェイン・オースティンの笑い

—Pride and Prejudiceの面白さ—

〇六七四三三三 辻村英介

Pride and Prejudiceが出版されてから二百年が経とうとしてゐる。このロングセラーの理由は何か。無論、面白いからである。しかし、どうして面白いのだろう。面白いと一口に言っても色々な面白さがあるが、オースティンの作品を読んでもっとも強く感じる面白さとは、やはり「笑う」ことによつて引き起こされているように思う。私は笑いという観点からこの小説の面白さに迫ることにした。

この小説の登場人物の笑いを分析すると、明らかに「笑つた」と描写されているのはごく限られた人物であり、その他の人々は滅多に笑っていないことがわかる。キャラクターが笑つたことが示される箇所を数えると、その半数は主人公、エリザベスのものであり、次いで多いのはダーシーであった。つまり、この小説の笑いはヒロインとヒーローによつてまかなわれているのである。彼女

らが印象的に、そして効果的に笑うがために、我々読者はつられて笑みを零すのだ。

次に「笑い」そのものに目を向けてみよう。笑いとは緊張が緩和する時に起こるといふ桂枝雀の定義を元に考えてみると、エリザベスとダーシーにとつて笑いは大きな意味合いを持つことがわかる。エリザベスの笑いによつてダーシーは己の高慢から生じた「緊張」を「緩和」され、笑みをこぼす。彼に偏見を抱いているエリザベスはダーシーの笑いが不快であり、そこに「緊張」が生じるが、「彼を嫌うと頭の刺激になるの」という告白に見られるように、彼女は自ら「緩和」を生み出し、顔を綻ばす。その笑いがダーシーの目には「元気がつらつとした知性」として映り、ますます彼女に心惹かれることになる。二人は互いに自己の笑いの転調を知らない。それを知るのは読者だけなのであり、当人の意思の外で送り

手と受け手の間で起る転換によって、逆に両者の距離が縮まるといふ皮肉さが、読者をいつそう楽しませるのである。

この小説には多くの喜劇役者が登場し、我々は彼らをよく笑うが、ヒロインのエリザベスもまた、笑いの対象である。彼女がダーシーの手紙を読んで改悛する場面に笑いがある。その笑いは「泣き笑い」に近い。エリザベスと共に見方を変えることで価値観が変化する体験をし、それによって人間の弱さ、愚かさを愛おしむようになつて、彼女を笑うのである。この笑いを「緊張の緩和」というキーワードを元に考えてみよう。ダーシーの手紙で彼女の前に真実が立ち現れる折しも、読者は強烈な緊張をエリザベスと共有し、ここでエリザベスによる主観的笑いと読者の客観的笑いの合一が始まる。緊張はその後ゆつくりと緩和してゆき、やがてダーシーとの和解と結婚に至つて読者はエリザベスと共に幸福な幸せを味わうのである。我々はエリザベスを笑うとき、この小説の面白さそのものに触れているのだ。

以上のことからわかるように、この小説を読んで、我々は「ゆるむ」のである。途切れることのない「緊張」と「緩和」の連続によって骨抜きにされてしまうのだ。緊張の緩和ということは、広い意味では「快感」であり、それは「喜び」なのである。だから、この上もない面白

さを感じるのだ。ヒーローとヒロインの中にある *'pender'* と *'prejudice'* が霧消し、二人の心が解け合うところに本作における最大の「緊張と緩和」がある。これは彼らだけのものではない。読了して本を閉じた我々は、ふとタイトルを思い起こして解弛を味わう。やがて再び現実世界の「緊張」にとらわれる。だから我々は何度もこの小説に戻ってくる。これまでの二百年と同じように、そして、これからの二百年と同じように。

『世紀末ウィーンとクリムト』

○六L四一四〇 神谷 桃子

今から一五〇年前、現在のEUが完成するずっと前のヨーロッパに、多民族・多文化社会を抱え、時代のナシヨナリズムに逆らった国家が存在していた。ハプスブルク家の下に栄え、世紀末とともに消えたオーストリア帝国だ。そしてこの様々な民族、身分、国の変革という特異な環境の中で生まれ、日本でも広く知られる作品をいくつも生み出したのが画家グスタフ・クリムトである。本論文では帝国末期の歴史とともにその文化に焦点を置き、画家の生涯と併せて作品を解釈してゆく。

第一章では、オーストリアの多民族国家の確立と二〇世紀末の都市改造、また国民性であるウィーン気質を明らかにした。ハプスブルク帝国は「千年王国」とも言われ、神聖ローマ帝国皇帝の承継化など、ヨーロッパで長く権勢を誇ってきた。多民族性を国名に配した「オーストリア＝ハンガリー二重帝国」はその最後の舞台である。まず神聖ローマ皇帝フランツ＝カールの時代から、すでに国家としての一体性を持ち始めていた家領が、ナポレ

オン軍との敗戦で神聖ローマ帝国が廃止されたのをきっかけにオーストリア帝国となった。その後三月革命によって圧制を敷き、保守主義を振りかざした宰相が亡命。この時、国民たちは不作やインフレ、重税の不満とともに民族解放も強く要求した。そして皇帝がハンガリー王国代表に自治を認めてしまったことで、解放運動が各地で勃発。軍の制圧も市民に阻まれ皇帝一族をも逃亡へと至った。最終的にフランツ＝ヨーゼフの皇帝即位が前皇帝の認可を反故にしたので反乱は制圧できたが、一八五九年にイタリアが統一と独立を目指した戦いでオーストリア軍は敗北。六六年には対プロイセン戦争にも敗北を喫し、帝国はドイツ統一の主導権をも失った。

イタリアからの撤退とドイツ連邦からの離脱を経てオーストリアがドナウの帝国として生き残るためには、ハンガリーとの協調が不可欠であった。そこで和解を結び、マジャール人の自治を認めて「二重帝国」を成立させたのであった。リング・シュトラッセを主とする都市改造

はその代表的な政策で、そこを中心としてウィーンは都心から外郭部へなだらかな階層社会を形作る、均整のとれた円錐形階級都市となったのであった。

第二章、「二重帝国」の歴史にすっぽりと重なるように時代の過渡期に生きた、画家クリムトの生涯を追った。ここでは彼の人生や画風の変化に併せ、当時のウィーン芸術の風潮も示した。

第三章ではクリムトにみる世紀末を考察した。前時代の用法から脱し、独自の様式を確立した彼の絵には、世紀末ゆえのアカダンスの雰囲気、帝国衰亡の期待と不安を感じさせる空気がみてとれる。それを以下の3つの要素に分けた。

- ① 危うい安定の上で発展した享樂的なウィーンの豪華さが金色の裝飾に。
 - ② 誰もが感じていた、いずれくる帝国の崩壊と未来への不安が抽象化された悪に。
 - ③ そして崩壊の不安と入り混じった未来への期待が妊娠した女性に表れている。
- (また②、③が混在する場合は、これを輪廻転生のイメージとして捉えた。)

これらの要素を踏まえた絵の他に肖像画を加えても、作品には圧倒的に女性を描いたものが多い。彼女たちは時に「ファム・ファタル」として、時に「天使／聖母」

として描き分けられてはいるが、そのことよりも重要なのはいずれの場合も主役は男性ではなく女性であるということである。いつの時代も、不安定な社会にあつてまづ被害を受けるのは女性である。世紀末ウィーンも例外ではなく、自身も下層地位の出身である彼は彼女たちを目の当たりにした。よって作品において女性を描き、絵画の中で女性に力を与えたのではないだろうか。また崩壊を予感させる抽象化された悪と同時に妊婦を配することで、輪廻転生において希望(「子ども」)を生み出す女性の神秘性を表したとも見える。「死」と混在する「エロス」は、彼の女性を賛美する気持ちの表れであつたといえるのである。